

「過敏型」自己愛傾向と自己不全感および空虚感との 関連

稲永, 要
九州大学大学院人間環境学府

<https://doi.org/10.15017/18454>

出版情報 : 九州大学心理学研究. 11, pp.135-143, 2010-03-31. Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :

「過敏型」自己愛傾向と自己不全感および空虚感との関連

稲永 要 九州大学大学院人間環境学府

Relation among the hypervigilant type in narcissism, the sense of self-insufficiency, and emptiness

Kaname Inanaga (*Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University*)

The purpose of this study was to investigate the relation among the hypervigilant type in narcissism, the sense of self-insufficiency, and emptiness. For the first study, the sense of self-sufficiency scale was constructed. The scale comprised three factors, namely, “insufficiency of self-expression”, “instability of self-image”, and “identity defusion”. For the second study, the hypervigilant tendency was classified into High and Low, and the results of *t*-tests showed that the High group showed a significant higher score for sense of self-insufficiency and emptiness than the Low group, contrary to the oblivious type in narcissism. Furthermore, the results of Pass Analysis showed that the hypervigilant tendency had an influence that heightened the sense of self-insufficiency and emptiness. Further, it was also indicated that the influence of hypervigilant tendency on emptiness had two processes: one is direct influence and the other is indirect influence through the sense of insufficiency.

Key Words: hypervigilant type in narcissism, the sense of self-insufficiency, emptiness

I 問題と目的

1. 自己愛の2タイプについて

青年期は自己愛の高まる時期であるとされるが、特に最近の青年はその傾向が顕著であるという指摘があり(福島, 1992; 町沢, 1998), 精神医学や臨床心理学などの分野で自己愛への関心が高まっている。

また近年, Gabbard (1989) に代表されるように, 自己愛に二つのタイプが存在すること - 「無関心型 (oblivious type)」と「過敏型 (hypervigilant type)」 - が臨床現場から指摘されるようになった。無関心型は一見傍若無人で自己顕示欲が強く, 他の人々の反応に鈍感な, いわば「恥知らず」な特徴を示すのに対し, 過敏型は他の人々の評価に敏感で, 内気で傷つきやすく, 対人恐怖的な特徴を示すとされる。しかしこれら二つのタイプは明確に区別されるものではなく, 自己愛人格障害はこれらを両極とする連続体のどこかに位置するものであるとされ, 無関心型・過敏型といった分類はその個人の中の優勢な側面を指し示すとされる (Gabbard, 1989)。

2. 自己愛に関する実証研究

これまで, 自己愛に関する実証的研究は Raskin & Hall (1979) による自己愛人格目録 (Narcissistic Personality Inventory; NPI) の開発以降, 活発に行われてきた。日本においてもいくつかの NPI 日本語版が作られ, 対人関係 (友人関係・異性関係) との関連 (例えば小塩,

1998; 岡田, 1999; 小塩, 2002) や親の養育態度との関連 (宮下, 1991), 適応との関連 (小塩, 2002) など様々な研究が行われている。

こうした自己愛の定義に関して, 小塩 (1998) は “自分自身への関心の集中と, 自信や優越感などの自分自身に対する肯定的感覚, さらにその感覚を維持したいという欲求” と記述している。また大淵 (2003) は, 自分のプライドを満たそうとする強い “自尊心欲求” を自己愛の本質的欲求として指摘している。このような見方は, もともと 「自分を愛する」といった性倒錯の一種として捉えられてきた自己愛という概念を, パーソナリティ傾向として, より一般的な青年にも当てはまるよう捉え直されたものと言える。上述した自己愛における二つのタイプはいずれも, 小塩 (1998) の言う自分自身に対する肯定的な感覚を維持したいという欲求や, 大淵 (2003) の言う強い自尊心欲求を, 意識的あるいは無意識的に抱えているということは共通しているものの, その自尊心を維持する方略が異なっていると考えられる。すなわち無関心型は他者の評価には関心を払わず (自身の評価を考える際に他者評価を勘定に入れず), 自己の尊大さをアピールすることで自尊心を高めようとするのに対し, 過敏型は絶えず他者の評価を気にし, 自己の否定的な評判がないか, 自身の落ち度がないかをチェックすることを通して, 何とか自己評価が低まらないように努めていると考えられる。

さて, これまでの自己愛の実証研究で多用されてきた

NPI は、DSM- の自己愛人格障害の診断基準をもとに作成されたため、自己愛の中でも誇大的・自己顕示的な側面が強調されており、Gabbard のいう二つの側面のうち無関心型に関連しているとされる。それゆえ NPI を用いたこれまでの多くの実証的研究は無関心型の特徴を捉えてきたと言える。一方過敏型に関しては、臨床現場においてその概念の有用性が指摘されるようになってきたものの、実証的にはまだ発展途上にあり、高橋 (1998) を皮切りに過敏型自己愛傾向を測定する尺度作成の議論が活発化し始めたところである (例えば相澤, 2002; 小塩, 2002; 中山ら, 2006; 清水ら, 2008)。これらの尺度は、その特徴から大きく二通りに分類することができる。一つは NPI の得点が高いことを過敏型自己愛の前提とする測定方法 (例えば小塩, 2002; 清水ら, 2008) である。しかし、過敏型自己愛の場合、他者にどう思われているのかに過度に神経を使うため、表面的には自己愛的な誇大さや自己顕示欲は影を潜め、質問紙法では必ずしも自己愛傾向が高いとは評定されない場合があると考えられる。そこで自己愛傾向の高低に関わらず、結果的に表れる過敏な対人関係のあり方を測定する方法も検討されている (例えば高橋, 1998; 相澤, 2002; 中山ら, 2006)。

このように過敏型自己愛に関して、現在それを実証的にとらえるための尺度の作成はなされるようになってきたものの、その心理的特徴をとらえた実証的研究はいまだ少なく、過敏型自己愛の自己評価を維持する機能の脆弱さを検討した上地・宮下 (2008) などが散見される程度である。日本における自己愛人格障害の症例は、自己評価の低さ、抑うつ感、引きこもりといった Gabbard のいう過敏型自己愛のタイプに近く、非常に傷つきやすい人たちが多いという指摘があることから (福井, 1998)、日本において過敏型自己愛の特徴について実証的に検討する意義は大きいと言える。

3. 過敏型自己愛と自己不全感

本研究では過敏型自己愛の心理的な特徴について、その独特な自己のありように着目する。過敏型自己愛傾向の高い人は、自分を価値ある存在として認めてほしい、賞賛してほしいといった強い自尊心欲求を内に秘めているながら、他者の評価や反応に敏感なため、対人的には自己主張を抑制したり、内に秘めた自分と外向きの自分との間のギャップが大きいことが推測される。すなわち「表と裏」「本音と建前」といった内と外との乖離が大きく、自己像に関して不確かさや不全感を抱きやすいのではないだろうか。

小塩 (2003) は、自己愛傾向の高い人の面接調査を行う中で、過敏型自己愛傾向の高い人は、他者から見た自分と自分の思う自己像にギャップがあり違和感を覚える

ことや、ありのままの自分を相手に伝えることができないといった感覚を抱えていることを報告している。一方、心理臨床の現場から、対人恐怖を自己愛の病理として理論化した岡野 (1998) は、そうした対人恐怖に悩む人は、極度に理想化された自己イメージ (理想自己) と過度に卑下された自己イメージ (恥ずべき自己) との間を揺れ動き、安定することが困難であるとし、自己像の不安定さを指摘している。同様に、小松 (2004) は過敏型自己愛傾向の高い人は他人に賞賛されたいという欲求が強い反面、他者の評価に過度に敏感であり、その結果他者に迎合的になり「人前に出ると自分がなくなる」という感覚に苦しむことがあると指摘している。

このような臨床現場や面接調査の知見をまとめると、過敏型自己愛傾向の高い人は、自己像や自己の感覚に関して、以下の四つの特徴を持つと仮定される。すなわち

対人関係において、自分の思う自己像と他者から見た自己像が異なるといった自己像のギャップを感じやすい (自己像のギャップ)、 内的にも、理想自己と恥ずべき自己が揺れ動き、自己像が安定しない (自己像の不安定性)、 そのために「自分がない」という同一性の拡散を抱きやすい (同一性の拡散)、 さらに、他者に対して過度に抑制的になり、自然に自己主張をすることが難しい (自己表出不全) の四つである。

そこで本研究では、以上のような「自己像のギャップ」「自己像の不安定性」「同一性の拡散」「自己表出不全」に集約される、自己像が揺らぎ、自分という実感に乏しく、他者に対しては自己をありのままに表出することが難しい状態を自己不全感として操作的に定義し、過敏型自己愛との関連を実証的に検討する。そうすることでこれまでいくつかの先行研究の中でそれぞれ個別に指摘されてきた、過敏型自己愛における自己不全感の四つの側面について、実証的な観点からより包括的に検討することができると思われる。

4. 過敏型自己愛と空虚感

さらに本研究では過敏型自己愛と空虚感との関連も取り上げる。過敏型自己愛傾向の高い人は、優れた自分をもっと賞賛してほしいといった自己愛的欲求を抱いていても、それをあからさまに表現することは少なく、満たされない思いを抱きやすいと推測され、人間関係に空しさを感じやすいのではないだろうか。また、上述したように過敏型自己愛傾向の高い人は安定した自己像を持つことが難しく、「自分がない」という感覚を抱きやすいと仮定すると、そうした自己不全感が高いことで余計に空虚感を抱きやすいと推測される。

自己愛と空虚感との関連を調べた陶山ら (1996) の実証的研究では、自己愛傾向が高いほど空虚感が低くなるという結果が導かれているが、これは NPI を用いて検

討されたために、自己愛の中でも特に無関心型自己愛の特徴を示したものと考えられる。Kohut, H. (1971) は自己愛パーソナリティと空虚感との関連を指摘しているが、Kohut の対象とした自己愛パーソナリティは過敏型自己愛に近いという指摘もあり (上地, 2004), 過敏型自己愛と空虚感には正の関連が推測される。

5. 本研究の目的

以上より、本研究ではまず自己不全感を測定するための尺度の作成を行う (第 1 研究)。そして自己愛傾向の中でも特に過敏型自己愛傾向に注目し、これまで実証的にはほとんど検討されてこなかった自己不全感との関連を検討し、さらに空虚感との関連も検討する。加えて、過敏型自己愛傾向が自己不全感や空虚感にどのように影響しているのか、また自己不全感を媒介して空虚感へ影響する過程も探索的に検討する (第 2 研究)。

本研究において過敏型自己愛と自己不全感、空虚感との関連を検討することで、これまで「他者評価に過敏で対人恐ろしい」といった対人的な特徴が強調されがちであった過敏型自己愛傾向の高い青年に関して、内的には人知れず不全感を感じているかもしれないという、その自己の独特な様相を実証的に把握することができると考えられる。

II 第 I 研究

1. 目的

自己不全感に言及していると考えられる心理臨床の論文や面接調査からの知見、自己不全感と類似した概念を測定していると考えられる尺度の項目を参考にし、自己不全感を包括的に測定する尺度を作成する。

2. 方法

本研究で定義した自己不全感を記述していると考えられる項目を「多次元自我同一性尺度」(谷, 2001), 「自己像の不安定性尺度」(小塩, 2001), 「自己愛脆弱性尺度」(上地ら, 2002), 「schizoid 心性尺度」(山川, 2002), そして小塩 (2003) の面接調査から集め、さらに必要と思われる項目を付け足して「自己不全感尺度」40 項目を作成した。

1) 調査時期・調査対象

調査は 2005 年 10 月、大学生 184 名 (男性 146 名, 女性 38 名) を対象として実施した。平均年齢は 19.1 歳 ($SD = 1.12$)。調査対象の選定にあたっては、自己不全感などアイデンティティに関わる諸問題は青年期に顕在化しやすいこと、さらに本調査で検討する自己愛傾向も青年期に顕著であることなどを考慮し、青年期に位置する

大学生とした。

2) 調査内容

項目を収集した「自己不全感尺度」40 項目と、基準関連妥当性を検討するための「アイデンティティ尺度」(下山, 1992) 20 項目, 「基本的信頼感尺度」(谷, 1996) 11 項目, 「自尊感情尺度」(山本ら, 1982) 10 項目の 4 尺度からなる質問紙を用いて実施した。

2. 結果と考察

1) 項目分析

自己不全感尺度 40 項目の合計得点を算出し、その上位 25% (高群) と下位 25% (低群) を抽出し、それぞれの項目について G-P 分析を行った。その結果、高群と低群との間に有意な差が見られなかった「私には素の自分でいられる居場所がある (逆転項目)」「自分自身をととても良く評価する日もあれば、とても悪く評価する日もある」「私は現在自分自身について持っているイメージが、絶対に変わらないと思う (逆転項目)」の 3 項目を削除した。

2) 自己不全感尺度の因子分析

項目分析を通過した 37 項目について因子分析を行い (最尤法・プロマックス回転), 共通性が .16 以下の項目, 因子負荷量が .40 以下の項目を削除した結果, 合計 28 項目となり, 3 因子が抽出された (Table 1)。第一因子は「たいていの場合, 自分をさらけ出すことができる」「本心を人には見せない」などの項目からなり, 自分をありのままに他者に表現したり, 伝えたりすることができない状態を表すと考えられ, 「自己表出不全」因子と名付けた。第二因子は「人に見られている自分と, 本当の自分は一致しないように感じる」「私にはいろいろな自分があって, 一つにまとまらない」など, 自分の思う自己像と周りからフィードバックされる自己像とのギャップや, 自己像が自分の中でも安定しない状態を表すと考えられ, 当初想定していた「自己像のギャップ」と「自己像の不安定性」がこの因子にまとめられたと考えられる。すなわち自分の思う自己像と他者から見た自己像が乖離しており, 自己像が安定せず揺れ動く状態を指すと考えられ, 第二因子を「自己像の揺れ」因子とした。第三因子は「自分がないと感じることがある」「自分が分からなくなることがある」など自分という実感の欠如した感覚を指すと考えられ, 「同一性の拡散」因子とした。

3) 信頼性

自己不全感尺度全体, そして各因子ごとにクロンバックの α 係数を算出したところ, 全体では $\alpha = .93$, 第 1 因子は $\alpha = .91$, 第 2 因子は $\alpha = .86$, 第 3 因子は $\alpha = .81$

Table 1
自己不全感尺度の因子分析結果 (最尤法・プロマックス回転)

I 自己表出不全因子 < $\alpha = .91$ >			
29	たいていの場合、自分をさらけ出すことができる*	-.84	.08 .05
25	人前であるがままの自分を出すことができない	.71	-.11 .25
10	本心を人には見せない	.69	.16 -.29
38	自然に自分を出すことができない	.69	-.07 .30
19	友人にはありのままの自分を見せている*	-.67	.10 -.02
4	人とは壁を作って、距離をとる方だ	.67	.12 -.17
13	本音を隠さず、人に伝えることができる*	-.65	.14 .05
40	他人に自分の気持ちを表現することは難しいと思う	.53	.06 .00
32	無理をせず、自然体で生きられていると思う*	-.53	-.12 -.06
31	親しい友人でも自分を取りつくりすぎてしまう	.53	.04 -.09
39	友人の前では本当の自分という実感を得ることが難しい	.50	-.07 .38
37	自分のことを見せないように演技している面がある	.48	.29 .07
26	人前で「心を閉ざしている」と感じることもある	.48	.01 .21
11	本当の自分は他人には理解されないだろう	.48	.25 -.08
II 自己像の揺れ因子 < $\alpha = .86$ >			
2	人に見られている自分と、本当の自分は一致しないように感じる	-.01	.79 -.08
6	「偽りの自分」であると感じることがある	-.11	.77 .10
1	人前での自分は本当の自分ではないような気がする	.16	.77 -.15
3	私には強い自分と弱い自分などいろいろな自分があり、どれが本当か分からない	-.10	.61 .16
14	私の中にはいろいろな自分があって、一つにはまとまらない	-.07	.55 .15
34	私は自分の深いところにあるものをおおい隠しているところがある	.17	.49 .06
35	自分の周りの人々は本当の私を分かっていると思う	.35	.47 .00
30	私は家族の前、友人の前など、場面によって自分に対するイメージが変わっている	.09	.41 -.05
III 同一性の拡散 < $\alpha = .81$ >			
28	「自分がない」と感じることもある	.03	-.19 .73
23	人前で演じている自分が嫌になる	.00	.12 .64
15	本当の自分はどこか他にあるのではないかと感じる	-.02	.24 .59
36	私は自分自身に対するイメージが変わりやすい	.03	-.05 .58
33	自分分が分からなくなることがある	-.21	.23 .57
12	「こんなのは自分じゃない」と感じることもある	-.17	.35 .51
因子間相関			
		.54	
		.49	.58

*は逆転項目をさす。

となり、いずれも十分な信頼性が確認された。

探索的に検討する。

4) 基準関連妥当性

3つの尺度との基準関連妥当性を検討した結果、想定された通り、各尺度とも $r = -.16 \sim -.60$ の負の相関が見られ、基準関連妥当性はある程度確認されたと言える (Table 2)。

2. 方法

1) 調査時期・調査対象

調査は2005年11月から12月にかけて、大学生262名 (男性125名、女性137名) を対象として実施した。平均年齢は19.6歳 ($SD = 1.56$)。

2) 調査内容

過敏型自己愛傾向と無関心型自己愛傾向の両方を測定することができる「ナルシシズム尺度」(高橋, 1998) 25項目、第1研究によって項目を選定した「自己不全感尺度」28項目、そして「空虚感尺度」(徳本, 2001) 15項目の3尺度からなる質問紙を用いて実施した。過

III 第II研究

1. 目的

過敏型自己愛傾向と自己不全感、ならびに空虚感との関連を検討する。また過敏型自己愛傾向が自己不全感や空虚感に対してどのように影響しているのかについても

Table 2
各尺度間の相関 (基準関連妥当性の検討)

	アイデンティティ尺度		基本的信頼感尺度		自尊感情尺度
	アイデンティティの確立	アイデンティティの基礎	基本的信頼感	対人的信頼感	
自己表出不全	-0.41**	-0.50**	-0.50**	-0.51**	-0.47**
自己像の揺れ	-0.16*	-0.42**	-0.46**	-0.27**	-0.27**
同一性の拡散	-0.26**	-0.30**	-0.55**	-0.24**	-0.34**

* $p < .05$, ** $p < .01$

敏型自己愛傾向を測定する方法は上述したように大きく二つに分類することができるが、過敏型の人は誇大自己が無意識に退いており、自己評価が低いという特徴も指摘されており(小松, 2004), NPIの得点の高いものだけを過敏型自己愛の対象とする方法ではとらえきれないと考えられる。そこで本研究ではNPIを用いず、Gabbard (1989)の記述に基づき、それぞれの自己愛に独特な対人関係の様式によって容易に二つの自己愛を測定できる高橋(1998)の尺度を用いることにする。高橋(1998)の尺度は「周囲を気にする傷つきやすいナルシズム因子」「周囲を気につけない誇大的なナルシズム因子」の2因子からなる25項目、6件法である。高橋(1998)の用いる因子名はやや長く、近年こうした自己愛のサブタイプは「過敏型」「無関心型」と称されることが多いことから、本研究では前者を「過敏型自己愛傾向」因子、後者を「無関心型自己愛傾向」因子として言い換えることとする。

3. 結果

1) 各尺度の因子分析

ナルシズム尺度25項目について、高橋(1998)にならって因子分析を行った(主因子法・バリマックス回転)。その結果、共通性・因子負荷量の低かった1項目を削除し、ほぼ先行研究通り2因子が得られ、過敏型自己愛因子、後者を無関心型自己愛因子と名付けた。ただ、本研究における因子分析の結果、先行研究において無関心型の因子に含まれていた項目「自分が良くてできるところを他人に示したい」は過敏型因子の方に組み込まれた。信頼性係数は過敏型自己愛因子は $\alpha = .89$ 、無関心型自己愛因子は $\alpha = .89$ であり、いずれも十分な値が得られた(Table 3)。

第 1 研究で作成した自己不全感尺度28項目について因子分析を行った(最尤法・プロマックス回転)。その結果、研究 とほぼ同じ3因子が確認され、信頼性係数は「自己表出不全」が $\alpha = .92$ 、「自己像の揺れ」が $\alpha = .85$ 、「同一性の拡散」が $\alpha = .82$ と、それぞれ十分な値を示したため、研究 においても第 1 研究の因子構造をそのまま採用することにした。

空虚感尺度15項目について、徳本(2001)になら

い因子分析を行った(主因子法・バリマックス回転)。その結果、共通性が低かった3項目を削除し、2因子が得られた。第一因子は「心がうつろに感じられるときがある」「不安になることがよくある」「投げやりな気持ちになることが多い」「やる気がしないことが多い」などの項目からなり、生き生きと世界と触れ合っているという実感が乏しく、そのために活力が低下したり、とまどったりする様子を表すと考えられる。先行研究にならい、この因子を「自己不確実感・自己不安定感」因子($\alpha = .82$)とした。第二因子は「私は生きがいのある生活をしている(逆転項目)」「毎日の生活にはりがある(逆転項目)」などからなり、先行研究通り「充実感喪失」因子($\alpha = .87$)とした(Table 4)。

2) 自己愛傾向と自己不全感、空虚感との関連 (t検定)

二つの自己愛傾向と自己不全感、空虚感との関連を調べるため、ナルシズム尺度の過敏型・無関心型の下位尺度得点上位30%を高群、下位30%を低群として、自己不全感尺度の合計得点と各因子の下位尺度得点、さらに空虚感尺度の合計得点と各因子の下位尺度得点を従属変数とするt検定を行った。

過敏型得点の高群($n = 75$)・低群($n = 77$)においては、自己不全感全体得点($t_{(150)} = -6.98, p < .01$)、自己表出不全($t_{(150)} = -6.03, p < .01$)、自己像の揺れ($t_{(150)} = -5.91, p < .01$)、同一性の拡散($t_{(150)} = -6.89, p < .01$)の平均値間に有意な差が見られ、過敏型得点の高群の方が低群よりもそれぞれの平均値が高いことが示された。一方で無関心型得点の高群($n = 70$)、低群($n = 77$)においては、自己不全感全体得点($t_{(145)} = 2.01, p < .05$)、自己表出不全($t_{(145)} = 2.19, p < .05$)の平均値間に有意な差が見られ、過敏型とは逆に無関心型得点の高群の方が低群よりもそれぞれの平均値が低いことが示された(Table 5)。無関心型では、自己像の揺れ、同一性の拡散については有意差は見られなかった。

一方空虚感に関しては、過敏型得点の高群・低群において、空虚感全体得点($t_{(150)} = -7.80, p < .01$)、自己不確実感・不安定感($t_{(150)} = -8.02, p < .01$)、充実感喪失($t_{(150)} = -4.53, p < .01$)の平均値間に有意な差が

Table 3
ナルシズム尺度の因子分析結果 (主因子法・バリマックス回転)

I 過敏型自己愛傾向 < $\alpha = .89$ >		
20	他人が自分に対して、どのような反応をするかとても気になる	.79 .02
12	ちょっとした批判ですぐ傷つけられる	.78 -.03
10	他人から批判されると憂うつな気分が長く続く	.77 -.07
6	自分が他人にどう見えているのか、とても心配になる	.71 .05
5	他人から批判されると全人格が否定されたように感じる	.69 .01
1	他人の様子をいつもかがってしまう	.65 -.02
18	批判に敏感なために、引っ込み思案になりがちである	.64 -.26
3	人前での失敗をいつまでも思い悩む	.64 -.06
15	常に優れた人や目上の人に認めてもらえなければ、自信が持てない	.56 .07
9	私は、臆病でほとんど自己主張ができない	.53 -.24
21	他人から批判されると、強い憤りを感じる	.52 .23
16	自分が良くできるところを他人に示したい	.43 .35
23	集団の中で他人が注目してくれないと非常に傷つく	.42 .31
14	非常に内気なため、争いごとは避けることが多い	.40 -.29
II 無関心型自己愛傾向 < $\alpha = .89$ >		
13	自分はとても有能な人間である	-.05 .79
19	人に対して強い影響力を持っている	-.08 .75
4	自分は尊敬されて当然の人間である	.02 .70
22	自分の能力や独創性にかんがりの自信がある	-.04 .70
7	自分の思うように人を動かす自信がある	-.26 .69
2	リーダーになる才能を持っている	-.04 .68
8	いつもみんなの注目の的である	-.14 .62
17	何においても自分が正しいと思う	.08 .60
11	人よりも常に目立つ存在でありたい	.22 .60
24	権威や、権力を持ちたいという気持ちが強い	.11 .57
因子寄与		5.60 5.03
累積寄与率 (%)		23.34 44.30

Table 4
空虚感尺度の因子分析結果 (主因子法・バリマックス回転)

I 自己不確実感・自己不安定感 < $\alpha = .82$ >		
9	心がうつろに感じられるときがある	.70 -.28
11	不安になることがよくある	.68 -.10
8	投げやりな気持ちになることが多い	.60 -.32
10	やる気がしないことが多い	.54 -.42
4	自分つまらない人間だと感じることもある	.52 -.40
5	悩んだり、迷ったりすることが多い	.50 -.07
15	自分ではどうしていいかわからないと思うことがよくある	.47 -.02
6	自分の周りにベールがかかったような感じがある	.41 -.23
1	しらけた感じになることがよくある	.35 -.25
II 充実感喪失 < $\alpha = .87$ >		
2	私は生きがいのある生活をしている*	-.17 .85
3	毎日の生活にはりがある*	-.19 .80
7	生活に充実感に満ちた楽しさがある*	-.17 .78
因子寄与		2.72 2.62
累積寄与率 (%)		22.7 44.5

*は逆転項目をさす。

Table 5
過敏型，無関心型の高・低群における人数，平均値 (SD)，*t* 値 < 自己不全感 >

	N	自己不全感全体		自己表出不全		自己像の揺れ		同一性の拡散		
		Mean (SD)	<i>t</i> 値	Mean (SD)	<i>t</i> 値	Mean (SD)	<i>t</i> 値	Mean (SD)	<i>t</i> 値	
過敏型	低群	77	96.16(23.63)	-6.98**	48.06(12.85)	-6.03**	30.14(7.42)	-5.91**	17.95(6.40)	-6.89**
	高群	75	124.75(26.78)		61.33(14.28)		37.87(8.67)		25.55(7.19)	
無関心型	低群	77	114.96(28.55)	2.01*	56.99(15.91)	2.19*	35.16(8.89)	1.35	22.82(6.85)	1.61
	高群	70	105.61(27.61)		51.44(14.59)		33.19(8.76)		20.99(6.96)	

p* < .05, *p* < .01

Table 6
過敏型，無関心型の高・低群における人数，平均値 (SD)，*t* 値 < 空虚感 >

	N	空虚感全体得点		自己不確実・不安定		充実感喪失		
		Mean (SD)	<i>t</i> 値	Mean (SD)	<i>t</i> 値	Mean (SD)	<i>t</i> 値	
過敏型	低群	77	26.95(5.86)	-7.80**	20.86(4.51)	-8.02**	6.09(2.34)	-4.53**
	高群	75	34.50(6.09)		26.61(4.32)		7.89(2.57)	
無関心型	低群	77	33.35(7.09)	3.27**	25.47(5.45)	2.51*	7.88(2.52)	3.73**
	高群	70	29.63(6.68)		23.28(5.05)		6.34(2.48)	

p* < .05, *p* < .01

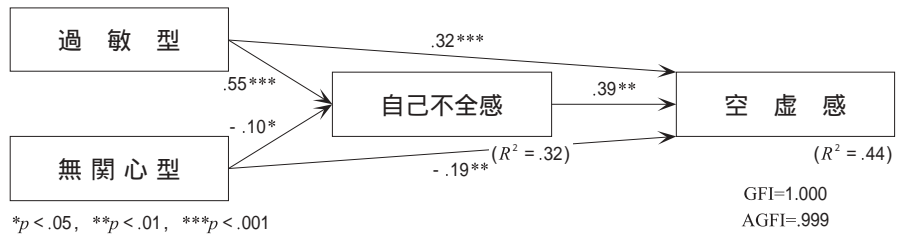


Fig.1 自己愛傾向が自己不全感，空虚感に及ぼす影響 (パス図)

見られ，過敏型得点の高群の方が低群よりもそれぞれの平均値が高いことが示された。また無関心型得点の高群・低群においては，空虚感全体得点 ($t_{(145)} = 3.27, p < .01$)，自己不確実感・自己不安定感 ($t_{(145)} = 2.51, p < .05$)，充実感喪失 ($t_{(145)} = 3.73, p < .01$) の平均値間に有意な差が見られ，過敏型とは逆に無関心型得点の高群は低群よりもそれぞれの平均値が低いことが示された (Table 6)。

3) 自己愛傾向の自己不全感および空虚感に対する影響 (パス解析)

過敏型自己愛傾向が自己不全感および空虚感に対してどのように影響しているのかを検討するため，パス解析を行った。まず，*t* 検定による分析から過敏型自己愛傾向は自己不全感および空虚感を高める働きがあることが考えられる一方で，無関心型自己愛傾向は自己不全感及び空虚感を低める働きがあることが考えられた。そこで，過敏型から自己不全感，空虚感へ向かうパス，無関心型から自己不全感，空虚感へ向かうパスをそれぞれ設定し

た。また自己愛傾向が自己不全感を媒介して空虚感に影響を及ぼすことも考えられたため，自己不全感から空虚感に向かうパスも加え，「過敏型」「無関心型」「自己不全感 (全体得点)」「空虚感 (全体得点)」の四つの変数からなるモデルを設定した (Fig.1)。

パス解析の結果，モデルのデータに対する適合度を表す GFI と AGFI の値はそれぞれ 1.000 と .999 であり，十分に高い値を示しており，構成されたモデルは標本共分散行列をよく説明していることが示された。パス係数はそれぞれ，過敏型自己愛から自己不全感および空虚感に対してそれぞれ .55 と .32，自己不全感から空虚感に対しては .39 と各々正の影響を持つことが示された。一方，無関心型自己愛は，低い値ではあるが自己不全感に対して -.10，空虚感に対して -.19 と負の影響を持つことが示された。また，このモデルを通して過敏型自己愛傾向から空虚感への影響に関しては，直接空虚感を高める過程と，自己不全感を媒介して空虚感を高める過程の二つが考えられることが示唆された。

4. 考察

1) 過敏型自己愛傾向と自己不全感との関連

過敏型自己愛傾向と、自己不全感との関連を検討した結果、過敏型自己愛傾向が高い人ほど、自己不全感の全体得点およびすべての下位因子の得点が高くなることが示された。これまで臨床現場や面接調査などの先行研究で指摘されてきた過敏型自己愛における自己不全感が、本研究において実証的に、そしてより包括的に確認されたと言える。

過敏型自己愛は他者の評価に敏感な対人関係のあり方に注目されがちであったが、その内面に目を向けると、自己像が揺れ動き、核とした「自分」という実感を得られずにいる姿が窺え、自己表出も自由にならない状態に陥りやすいと言える。とりわけ青年期にある人がこうした過敏型自己愛の傾向を持つ場合、自分とは何かというアイデンティティを確立していく上で、何らかの困難を抱えることが推察される。

先行研究において、同一性の拡散と自己愛傾向との関連については三船ら(1991)と佐方(1988)が実証的に検討し、いずれもNPIの下位因子の中に同一性の拡散と弱い正の相関関係にある因子を見出している。また自己像の不安定性と自己愛傾向については小塩(2001)が実証的に検討しており、NPIの下位因子である「注目・賞賛欲求」と自己像の不安定性が正の相関関係にあることを示している。しかし、これらの先行研究では自己愛と同一性の拡散や自己像の不安定性との間に何がしかの関連があることは示唆されているものの、それ以上の考察には至っていない。本研究では二つの自己愛という視点から検討し、過敏型自己愛傾向の高い人ほど自己不全感が高く、逆に無関心型自己愛傾向の高い人ほど自己不全感が低くなることが示された。このことから、先行研究において関連が示唆された自己愛と同一性の拡散や自己像の不安定性との関連について、自己愛の中でも特に過敏型自己愛傾向が関与していることがより明確になったと考えられる。

2) 過敏型自己愛傾向と空虚感との関連

過敏型自己愛傾向と空虚感との関連を検討したところ、過敏型自己愛傾向が高い人ほど、空虚感の全体得点、および二つの下位因子の得点が高くなるという結果が得られ、過敏型自己愛傾向が高い人は「心がうつろ」に感じられたり、充実感が得られないなどの空虚感を感じやすいことが実証的に示された。

これまで自己愛と空虚感との関連については、陶山ら(1996)がNPIを用いて検討し、自己愛傾向が高いほど空虚感が低くなるという結果を導いている。本研究においては無関心型自己愛傾向が高いほど空虚感が低くなるという結果を得ており、この陶山(1996)らの研究は自

己愛傾向の中でも無関心型の特徴を示していると考えられ、NPIによって測定される自己愛傾向が無関心型自己愛傾向と関連していることが本研究においても確認されたと言える。

以上のように、自己愛の中でも二つの側面によって自己不全感や空虚感との関連の仕方は異なっており、個人の中で無関心型と過敏型のどちらの側面が優勢であるのかを吟味することは心理臨床の場面でも重要な視点であると言える。

3) 過敏型自己愛傾向が自己不全感および空虚感に及ぼす影響

本研究では、自己愛傾向、特に過敏型自己愛傾向が自己不全感や空虚感にどのような影響を及ぼすのかについても探索的に検討した。

まず、自己愛傾向が自己不全感、空虚感に及ぼす影響関係について、Fig.1のようなモデルを得た。すなわち過敏型自己愛傾向が自己不全感、空虚感を高めるように影響するのに対して、無関心型自己愛傾向は自己不全感、空虚感を低めるように影響することが示され、*t*検定において示唆されたように、過敏型と無関心型は、自己不全感や空虚感に対してそれぞれ逆向きの影響を持つことが示された。

また、過敏型自己愛傾向が空虚感に及ぼす影響には二つの過程があることも示唆された。一つは過敏型自己愛傾向が直接空虚感を高める方向に作用する過程であり、もう一方は過敏型自己愛傾向が自己不全感を高めることで、間接的に空虚感が高まるという過程である。前者は、他者評価に過敏であることそのものが空虚感を生むという過程であり、他者評価に過敏になるあまり気疲れをしたり、他者の目を過度に気にしたところで結局は自己評価を回復することにはならないために、対人関係において空しさを感じてしまう過程であると推察される。一方、後者の過程は自己不全感を經由して空虚感が高まるという過程であり、他者評価を気にして他者に合わせようとするあまり、自己像が揺らいだり、「自分がいない」「自分が出せない」といった自己の不確実感を抱きやすくなり、その結果空しさを生じてしまう過程であると推察される。

このように過敏型自己愛は、直接的にも、そして自己不全感を經由して間接的にも空虚感を高める働きがあり、「人の目が気になる」「人にどう思われているか心配」と訴える過敏型自己愛傾向の高い青年は、対人関係や自身自身について空しさを抱きやすいと考えられる。

IV まとめと今後の課題

本研究では自己愛傾向の中でも、とりわけ日本人に多く見られるとされる「過敏型」自己愛に関して、その過

敏な対人関係のあり様ではなく、その結果もたらされる自己不全感や空虚感といった自己の感覚や内的な不適応感に注目して検討した。その結果、心理臨床の現場や面接調査においていくつか指摘されてきた過敏型自己愛における自己不全感や空虚感について、実証的に、そしてより包括的にその関連が示されたと言える。ただし、今回作成した自己不全感尺度は、当初4因子を想定しながら3因子しか得られず、またその構成概念妥当性についてもまだ十分検討されているとは言い難い。今後は、自己不全感尺度を精緻化していくとともに、今回想定した因子以外にも自己不全感として含めるべき因子がないかどうか検討する必要があると考えられる。

付記

本論文をまとめるにあたり、ご指導いただきました九州大学大学院人間環境学研究院教授の北山修先生、同准教授の福留留美先生に深く感謝申し上げます。

引用文献

- 相澤直樹 (2002)：自己愛的人格における誇大特性と過敏特性 教育心理学研究, 50(2), 215-224.
- 福島 章 (1992)：青年期の心 精神医学からみた若者 講談社現代新書
- Gabbard, G.O. (1989)：Two subtypes of narcissistic personality disorder. *Bulletin of the Menninger Clinic*, 53, 527-532.
- 上地雄一郎・宮下一博 (2002)：コフォートの自己心理学に基づく自己愛的脆弱性尺度の作成の試み 甲南女子大学研究紀要, 38, 1-10.
- 上地雄一郎 (2004)：自己愛の障害はなぜ生じるのか 上地雄一郎・宮下一博(編) もろい青少年の心 北大路書房
- 北山 修 (1993)：空虚感 加藤正明・笠原嘉・小此木啓吾・保崎秀夫・宮本忠雄(編) 新版精神医学事典 弘文堂
- Kohut, H. (1971)：*The analysis of the self*. New York：International Universities Press.水野信義・笠原嘉(監訳) (1994)：自己の分析 みすず書房
- 小松貴弘 (2004)：過敏で傷つきやすいタイプの状態像 上地雄一郎・宮下一博(編) もろい青少年の心 北大路書房
- 町沢静夫 (1998)：現代人の心にひそむ「自己中心性」の病理 過大な自己愛と現実とのズレに苦しむ若者たち 双葉社
- 宮下一博 (1991)：青年におけるナルシズム(自己愛)的傾向と親の養育態度・家庭の雰囲気との関係 教育心理学研究, 39, 455-460.
- 大淵憲一 (2003)：満たされない自己愛 - 現代人の心理と対人葛藤 ちくま新書
- 岡田 努 (1999)：現代青年に特有な友人関係の取り方と自己愛傾向の関連について 立教大学教職研究, 9, 21-31.
- 岡野憲一郎 (1998)：恥と自己愛の精神分析 岩崎学術出版社
- 小塩真司 (1998)：青年の自己愛傾向と自尊感情、友人関係のあり方との関連 教育心理学研究, 46, 280-290.
- 小塩真司 (2001)：自己愛傾向が自己像の不安定性、自尊感情のレベルおよび変動性に及ぼす影響, 性格心理学研究, 10(1), 35-44.
- 小塩真司 (2002)：自己愛傾向によって青年を分類する試み 対人関係と適応、友人によるイメージ評定からみた特徴 教育心理学研究, 50, 261-270.
- 小塩真司 (2003)：自己愛的な青年の他者認識 - 面接調査による検討 - 中部大学人文学部研究論集, 9, 55-65.
- 佐方哲彦 (1988)：同一性拡散の心理的特徴の一側面 - 自己愛傾向および共感性との関連 - 日本心理学会第52回大会発表論文集 p108.
- 清水健司・海塚敏郎 (2002)：青年期における対人恐怖心性と自己愛傾向の関連 教育心理学研究, 50, 54-64.
- 下山晴彦 (1992)：大学生のモラトリアムの下位分類の研究 アイデンティティの発達との関連で 教育心理学研究, 40, 121-129.
- 陶山 智・須永範明 (1996)：自己愛人格傾向に関する研究 - 不安、空虚との関係について - 日本大学心理学研究, 17, 3-11.
- 高橋智子 (1998)：青年のナルシズムに関する研究 ナルシズムの2つの側面を測定する尺度の作成 日本教育心理学会第40回総会発表論文集 p147.
- 谷 冬彦 (1996)：基本的信頼感尺度の作成 日本心理学会第60回大会発表論文集 p310.
- 谷 冬彦 (2001)：青年期における同一性の感覚の構造 - 多次元自我同一性尺度(MEIS)の作成 教育心理学研究, 49, 265-273.
- 徳本 祥 (2001)：青年期における空虚感と親からの心理的分離との関連に関する研究 心理臨床学研究, 19(2), 109-118.
- 山川祐樹 (2002)：schizoid心性について - 質問紙作成の試み - 京都大学大学院教育学研究科紀要, 48, 211-223.
- 山本真理子・松井 豊・山成由紀子 (1982)：認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68.